



平成29年10月26日

佛教大学附属幼稚園

手を取り見つめ合うヒト

園長 藤堂俊英

朝、窓を開けると秋の冷気にブルッと身震いする季節となりました。私がいる園長室は園庭側が緩やかなカーブの大きなガラス窓になっています。室内からは外の園庭で遊ぶ子どもたちの姿がよく見えます。当然のことながら、子どもたちの方からも部屋の中の私の姿が見えています。机に向かって仕事していて、ふと顔をあげると、いつの間にか子どもたちに見つめられていることがあります。ガラス窓には横一列になると、ゆうに二十人くらいの可愛いお顔が張りつきます。「二十四の瞳」なみのつぶらな瞳から見つめられるのです。窓は内と外との交流の窓口ですから、何か話したような可愛いお顔を見ると、仕事の手を休め窓際に駆け寄ります。いつも子どもたちから語りかけられることは、「なにしてんの？」か、自分たちの近況報告です。でも聖徳太子ではありませんので、同時に一斉に受ける問いかけや近況報告を聞いて応えるのは大変です。

「窓」といえば、仏教では私たちの感覚器官を内なる世界と外なる世界の交流の窓口（ドヴァーラ）であり、こころのはたらきが生まれてくる場所（アーヤタナ）とみています。子どもたちのつぶらな瞳も、そこで捉えられた映像を基に、やわらかなところが形をとって生まれてくる場所なのです。そのような感覚器官の理解は、ちょうど英米語の「インフォーメーション」が、「イン（内に）」と「フォーメーション（形成）」の組み合わせからできていることを思い出させます。

最近スマートフォンに内蔵されている小さなカメラでも、かなり鮮明な画像を記録できます。生物の中で私たち霊長類は、顔の前面に二つの目を持つ視覚優位のグループに属するのだそうです。カメラでいえばピクセル（画素）に相当するのでしょうか、ヒトの目の網膜には1億3000万個の視細胞があって、捉えた映像を信号として脳に伝えるのだそうです。次に中道正之（日本霊長類学会会長）著『サルの子育て ヒトの子育て』（角川新書）から、「見つめ合うヒト、見つめ合わないサル」という話を紹介してみます。サルの行動観察からわかったことは、母と子がお互いを見つめ合うことはあまりないのに、ヒトに近いゴリラなどの類人猿になるとそれが頻繁に確認できるようになるのだそうです。著者はそこをヒトの親子と対比して、「霊長類の共通祖先が樹上生活のために獲得した<ものを握る手>と<顔の前に並んだ目>は、日常の社会生活にも大きな影響をもたらしました。ものを握る手と見つめ合う目の恩恵を最も大きく享受しているのは私たちヒトだと思います。母は赤ん坊を両手で抱いて、赤ん坊を見つめ、赤ん坊も母を見つめます。抱き合い、見つめ合う親子ほど、結びつきを強く感じさせる光景は他にはないと思います。そして、互いに見つめ合いながら、手と手を握り合って握手。手と手をつないで歩きながら、ときどき横を見て互いに見合う親子やカップル。進化の過程で獲得した<ものを握る手>と<顔の前に並んだ目>が私たちの心をも豊かにしてくれたと、私は思っています」と結んでいます。

握る手は相手との距離をなくし、顔の前に並んだ目は適切な距離を確保することによって相手の姿を鮮明に捉えます。その手と目のバランスを上手にとるところに、私たちの心を豊かにするヒトの暮らしの真骨頂があると言えそうです。